HOKKESHU SHINPOU

平成21年10月1日

法華宗信報

No.130

発行　法華宗宗務院

法華宗ホームページ
www.hokkeshu.or.jp/

皆様に役立つ情報をお届けします

宗祖の御教え

をさなき人の御ために御まほり(守)さづけまいらせ候。この御まほりは、法華経のうちのかんじん、一切経のげんもく(眼目)にて候。
―中略―
このまんだら(曼荼羅)を身にたもちぬれば。王を武士のまほるがごとく、子ををやのあいするがごとく。
―中略―
一切の仏神等のあつまりまほり、昼夜にかげのごとくまほらせ給ふ法にて候。
よく〳〵御信用あるべし。

『妙心尼御前御返事』(定遺一一〇五頁)

法華宗教学研究所長
大平　宏龍

《ひとの尊厳性》

これは建治元年(一二七五)八月二十五日付で妙心尼に与えられた手紙と考えられている。日蓮聖人の「本弟子六人」のうちの日興上人の写本があるので、妙心尼は駿河国に住んでいたのであろうとされるが、詳しいことはわかっていない。

手紙の内容は理解しやすいもので、ことさら説明する必要もないであろう。ただここで「御守」と言われているものが、日蓮聖人が書かれた「お曼荼羅」であることは、注意したい。一般に寺社で出している「御守」は多いが、その本体はさまざまである。というより、その本体まで考える人は、あまりいないのが実状ではあるまいか。

私共が、たとえば御本山でいただく「御守」の本体は、御仏壇の中央最上段にかかげてある、御本尊。すなわち十界の御曼荼羅と同じものである。それは、中央に南無妙法蓮華経が、独得の形で書かれ、その南無妙法蓮華経によって、すべての衆生が、本当の尊い姿となる、そのことを図顕されたものである。それゆえ、あの御曼荼羅は南無妙法蓮華経のありがたい功徳を十界の聖衆の御名前によって示されたものであり、「曼荼羅」の語の訳として「輪円具足」とか「功徳聚」と、いわれるところである。それはまた南無妙法蓮華経で人間としての私共の本当の姿が示されるということでもある。つまり法華経が、私達に語りかけてやまないのは、「本来みんなぼさつであることにめざめよ」ということである。ふだんは、怒ったり笑ったり、妬んだり、争ったり。煩悩に追われて、本当の自分がわからないのが我々である。これを寿量品では「顛倒の衆生」という。それゆえ、私達は、南無妙法蓮華経と唱え、信じることで、知らずはからず浄化されてゆく。言いかえれば、私達は「自分さがし」ではなく、御題目に支えられながら「本来の自分を創りあらわしていく」そこに私達の生き方があり、やがて迎えねばならない死に対する安心もあるといえよう。そこで、法華経による菩薩行の根本は、南無妙法蓮華経を知らない人に、それを聞かせ、少しでも唱えていただけるように勧めることである。故に日蓮聖人の御教えからすると、南無妙法蓮華経によって、本当の「ひとの尊厳性」が明らかとなるのである。

現在は、働きたくても職がないなど、生きる上でも問題が多い上に、死についても問題山積である。たとえば『おくりびと』の映画は話題になったが、原作の『納棺夫日記』の作者、青木新門氏が、「この世を安心して生きるには、後の世も安心であることが絶対条件なのである」のに、そこの所を削除されてしまったと、強く批判している(『寺門興隆』第一二七号四八頁)ことはあまり知られていないであろう。生死を生きる人間の尊厳性が、現代では、あちこちでゆがめられているといえるのではなかろうか。

幼い子供に、本当の「御守」を与え、唱題を共に続けることは、決して小さいことではないのである。

『立正安国論』進覧七百五十年
誓願の集い＝法華宗の発信

法華宗 宗務総長
原井　慈鳳

本年は『安国論』の記念の年として日蓮聖人門下でも様々の行事がくり広げられております。その多くはイベントであり、『安国論』の記念の年として捉え、その解釈をめぐり様々な論が出ております。仏教者は『安国論』の宗祖の時代背景を今日も同様に論ずるもの、正しい教えが安穏なる世を築くだろうと論ずるもの、『安国論』は不軽菩薩の但行礼拝が根本と説くもの。『安国論』を総論として論ずるものです。

哲学者の大阪大学総長、鷲田清一氏は「不殺生」を僧侶が説けと、現実を直視した臨床哲学の必要を提唱し、環境宗教学の岡田真美子氏は鎌倉期は気象変動が激しい時代だった事、宗教学者の正木晃氏は鎌倉時代の人の寿命は短命であった事、そして今日の仏教が社会に積極的に関わるべきと論じておられます。むしろ仏教者より一般社会の研究者が現実的各論に言及しているのです。

門下の中には「『安国論』は協調性がないとか平和的でない」との論者もおり、伝統や習慣・地域・民族の違いを無視できないから「いろいろな宗教があってよい」としながら「門下が宗派根性を捨てて一大仏教として釈尊を前面に出すべき」という論者が居ります。これでは、宗祖が打ち立てた宗派の意味がわかりません。自らの矛盾に気づかないのです。

『安国論』は現実の世は困難が多いが、西方浄土の仏国でなく人々が手を取り合い足をふんばってこの世を浄土にして行こうという平和主義です。狭い一国の国益ではなく全ての人々の恒久平和の世界です。そして大切なのは『安国論』は鎌倉幕府にのみ説かれたのではなく今日の国民にも説かれているという認識です。

そして私共は「立正」を持つことから「安国」への道筋として信仰の寸心を改めて実乗の一善に帰せよ、即ち「菩薩行の実践をせよ」との宗祖の御意に気づかなければなりません。

人々の心を開くのは摂受です。協調性は必要です。大事なのは、その心に仏の種を植える菩薩行です。不軽菩薩の弘経です。それが真の折伏です。これを理解しなければ宗祖の御意はわからないでしょう。

危機的な今日の世法、環境の悪化に対して今日の『立正安国論』とは何か。各論に踏み込み我宗は訴えているのです。警鐘を鳴らしております。物質的にはほどほどの幸せ。しかし他の命のために尽くす供養という大きな幸せ。その生き方が世の破滅を止め、「安国」への原動力となるべきです。

「誓願の集い」は宗祖に対する私共の「菩薩行の実践」の誓いの日なのです。

目次　NO.130

❷「宗祖の御教え」
法華宗教学研究所長　大平　宏龍
❸『立正安国論』進覧七百五十年
誓願の集い＝法華宗の発信
法華宗宗務総長　原井　慈鳳
❹【特集】宗祖御直弟　日春聖人
第七百御遠忌
法華宗教学研究所員　芹澤　泰謙
❺【特集】日弁大正師
第七百御遠忌奉讃Ⅳ
細草檀林・南林山住本寺　檀徒　古山　豊
❻誰でも分かる
現代に生きている教学
法華宗興隆学林　教授　井原木　憲紹
❼現代の諸問題
大阪・谷町　妙法寺　住職　伊藤　信城
❽「実乗の一善」
菩薩行研究所長　原井　慈鳳

表紙写真

夏の暑さも和らぎ、心地良い風を感じる事が出来るようになった頃、赤ちゃんを身ごもった若い夫婦に出会いました。

「もうすぐ出てきてくれるんですよ」お父さんとお母さんの幸せそうな笑顔がとても印象的でした。この信報が皆様の手に渡る頃には、きっとパパとママの腕の中で、優しさに包まれながら、泣いたり笑ったりしている事でしょう。

写真家　小髙　雅也

特集

宗祖御直弟日春聖人 第七百御遠忌

―日春聖人と『宝物集』―

法華宗教学研究所員　芹澤　泰謙

明年（平成二十二年）は大本山光長寺の同時二祖のお一人である日春聖人の第七百遠忌に当たります。日春聖人の説明は本紙（第一二七号）で、太田晴道上人が述べておられるので、今回は『宝物集』について紹介させていただきます。

『宝物集』とは、平安時代の終わり、平康頼という人によって編纂された仏教説話集で、多くの写本が残されておりますが、その中の一つに日春聖人の写本があり、光長寺に格護されています。

『宝物集』は、鬼界ヶ島から京の東山に帰ってきた男が、嵯峨の釈迦堂を訪れ、寺僧より本尊の釈迦像の由来を聞き、その日は釈迦堂に宿泊をする。その晩、人々の寝静まった頃「心あるばかりの者」が、この世での宝物は何か、ということを論じ合い、最後に仏道こそが最大の宝物だということになり、続いて僧とおぼしき人が、仏道について物語ることとなる。

人の世のはかなさや憂いを説き、六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）の順に語っていくのであるが、特に人間界のそれが、微に入り細に入り語られている。生老病死の四苦から始まり愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦の八苦が詳細に語られて、六道を終わるのである。そして、聞き手の一人が、六道からの脱出を問うに対して、成仏に通じる十二の道を示して物語が終わるのである。

現在『宝物集』は全体巻七として、岩波書店の「新日本古典文学大系」に載せられておりますが、日春聖人の写本は巻一のみにて、その奥書に

「弘安十年二月一日書了

尺（原文のまま）日春」

と、日付と署名があり、書写年代や、筆者が明白な文献資料として、第一級の価値あるものとされ、『宝物集』の写本の最古のものであります。

そのことから、平成六年六月二十八日付で、国の「重要文化財」の指定を受けました。

ちなみに、日蓮大聖人は、著作やお手紙の中に『宝物集』の中から多くの引用をされており、『宝物集』を参考書籍とされていたことが知られております。

そのため、御直弟の日春聖人が同書を写本されたことは十分に理解できることなのです。参考ですが『宝物集』の写本は大本山本能寺に鎌倉期末のもの（巻三）が一冊、身延山久遠寺には室町期のものが上下二冊（抜粋本）が保存されております。

宝物集写本（日春聖人筆）

特集

日弁大正師 第七百御遠忌奉讃Ⅳ

―細草檀林について―

細草檀林
南林山住本寺 檀徒
古山　豊

はじめに

江戸時代、関東地方には多数の檀林が存在した。なかでも千葉県八日市場（現匝瑳市）の飯高檀林・多古町の中村檀林・大網白里町の小西檀林は広く知られていたが、細草檀林もその一つである。拙宅の並び大網白里町立白里中学校（千葉県山武郡大網白里町細草）がある。この地は江戸時代から明治にかけて細草檀林・法雲山遠霑寺があった歴史的に由緒ある場所である。時の流れの中に埋もれた史実を掘り起こし、現在の光に照らして考えてみるという作業は実に興味深いものである。高校で歴史を担当してきた小生にとって、檀林の存在を知ったのは恥ずかしながら十年ほど前のことである。百年以上も前に廃檀となり、史資料が少ないなかでの手探りの調査は非常に困難が伴った。しかし、調べ始めてみると知る人ぞ知る存在となっていた檀林の概要が次第に浮き彫りとなってきたので、ここに紹介させていただきたいと思う。

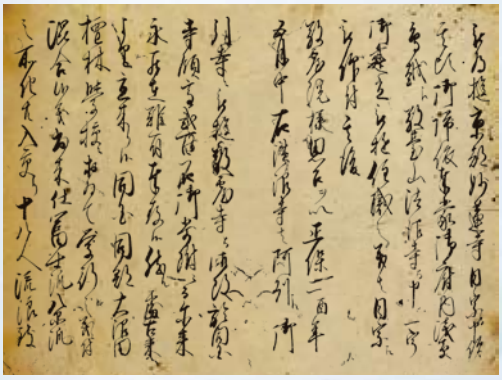
細草檀林の成立

辞典によると、檀林とは、一般に「談林」と書き、学問・芸術などを講ずるところとされているが、仏法上では「檀林」と書き、栴檀林の意味であるという。僧侶が学問を積み大成し、「栴檀」のように放香を放つことを期待する意味が含まれているという。

細草檀林を調査する切っ掛けとなったのは、小生の旦那寺、法華宗南林山住本寺住職の高橋真純師より『細草檀林由来書』（以下『由来』、寛永十八年巳八月七日）、「法雲山檀林古制之條目」等の古文書（コピー）解読を依頼されたことがその始まりである。

細草檀林は、寛永十八年（一六四一）に設けられ、明治初年に廃檀となるまで二百年以上続いた。従って、その成立は江戸の初期、今から三六八年前の三代将軍家光の時代ということになる。最盛期は、天和より寛保年間（一六八一～一七四四）にかけてであり、常時ではないにしろ七百名の学徒が登載されていたという。そもそも、寒村の細草村に檀林が設けられた経緯は、茂原市の大本山鷲山寺の日弁門流の学問所であった大沼田檀林（現千葉県東金市大沼田妙経寺）で、教義解釈をめぐる大論争が発生し、紛争へと発展したことが要因のようである。紛争の結果、十八名が流浪の身となってしまった。この様子を聞いた、隣の細草村の八名の地主が土地を寄進し、鷲山寺第十八世日達聖人を招き新たな学問所として八品派（日弁門流）と静岡県大石寺（富士派）合同の細草檀林が誕生した。両檀林の距離は直線距離にするとわずか二㎞程度である。細草檀林資料『富士宗学要集』によると、地積は「東西八十間、南北一百歩、西南には原野渺々として遠く人家を絶し・・」とあるので、住本寺屋敷を含めるとかなり広大な面積を有していたことが読み取れる。

（続きは次号131号掲載）



細草檀林由来書

誰でも分かる現代に生きている教学

「お会式」―命をみつめて―

法華宗興隆学林 教授
井原木　憲紹

宗祖日蓮大聖人は、弘安5年(1282)10月13日、武蔵国池上の檀越池上宗仲の館で61歳を一期として入滅されました。身延から常陸の湯に湯治に向かわれる途でありました。

佐渡赦免後、幕府に三度目の、諸宗が法華に帰一すべきこと、を諫言されましたが用いないので、「三度国をいさむるに用ひずば、山林にまじわれ」(『報恩抄』)と、鎌倉から身延の山に入られたのです。やがて寒さ厳しい山奥での生活は宗祖の御体を蝕んでいったのです。

身延における晩年の宗祖は、人生の無常である生老病死や愛別離苦に対して悲哀の情を深くされ、人間味のある心情を吐露されることがしばしばありました。宗祖壮年の頃、羅漢にも嘆きがあることは「釈迦佛御入滅のとき、諸大弟子等のさとり(悟)のなげき、凡夫のふるまひ(振舞)を示し給か。」(『上野殿御家尼御返事』)と表現されましたが、弘安4年、病苦が進み「今年は正月より其氣分出來して、既一期をわりになりぬべし。其上、齢既六十みちぬ。たとひ十に一今年はすぎ候とも、一二をばいかでかすぎ候べき。」(『八幡宮造営事』)と、余命いくばくもない様子を示されながら、子息に先立たれた南条氏の母の心痛に対して、「母よりさきにけさん(見参)し候わば、母のなげき申つたへ候はん。」(『上野殿母尼御前御返事』)と慰めの言葉をつづられています。弘安5年、篤信の南条(上野)時光が大病にかかった時、「天魔外道が病をつけてをどさんと心み候か。命はかぎりある事なり。すこしもをどろく事なかれ。」(『法華証明鈔』)と同じ状況にあった宗祖御自身と重ねあわせ、慰められています。

しかし、法華経行者としての宗祖は、「定業の者は藥變じて毒となる。法華經は毒變じて藥となると見えて候。」(『四条金吾殿御返事』)とも示され、命の終焉である死についても「死ぬる事も疑ひ無き者か。經に云く、生滅滅已、寂滅為楽、云々。今毒身を棄て、後に金身を受くれば豈に歎くべけん乎。」(『阿佛房御返事』)と法華経での信仰の帰結の言葉を示されているのです。

弘安5年の9月、門弟達の勧めもあってか、養生のために山を下り常陸の湯に向かわれました。その途中の御入滅です。

「お会式」とは、宗祖の御入滅を悼む忌日の法要で、門下の僧俗によって修される「御影供」、「御命講」と呼ばれた法会であります。やがて「お会式」は、法華信仰を身をもって弘められた宗祖への報恩感謝や加護を願う法会となり、江戸時代に入ると祖師信仰の昂揚に伴い、『東都歳事記』(天保9年)に「法会の間一宗の寺院仏壇を輝かし、造花を挿し荘厳目を驚かしむ。参詣の輩は月末迄出る。在家にも宗門の徒は会式と称して、祖師に供養し、客を迎ふ」と記されるように、民衆が、法悦歓喜して、宗祖御入滅の時、池上で奇しくも咲いた桜の花にちなんだ「会式桜」の造花や「万灯」を造り飾りたてて、賑わいを増した一般民衆の年中行事へと発展して来たのです。

会式とは、本来「法会儀式」の略称で、朝廷や仏寺で行われた法事や仏事の総称でしたが、江戸時代以降、「お会式」は、宗祖日蓮大聖人の忌日に法華宗寺院で行われる法会を指すことが通例となりました。

今年もお会式を迎え、命の尊さや法華信仰の尊さを御指南下さった宗祖への報恩感謝の誠を捧げようではありませんか。

現代の諸問題

PTAを取り巻く諸問題の解決は「報恩」に糸口あり

大阪・谷町 妙法寺 住職
伊藤　信城

「モンスターペアレント」・「給食費未納問題」・「児童虐待」などなど。

現在の学校・PTAの現場には、深刻な問題が山積しています。わたしたちの自己中心的で身勝手な主張や周りの人権を軽んじる言動は、取りも直さず、「命の尊厳」に関わる大きな問題だと見ることができるでしょう。

わたしは現在まで十数年間、PTA活動に関わってきています。わたし自身は、多くの人と知り合え、触れ合え、多くの教示を得ることができたことで、人としての生きる幅が広がった気がします。しかし、子どもたちを取り巻く教育や生活環境は激変し、保護者の意識も大きく変容してきていることも実感します。そんな中、PTA活動は様々な問題に直面しながらも、子どもたち、おとなたちの幸せを願いながら活動しているのが現状です。

PTAを取り巻く諸問題の根源はどこにあるのでしょうか？それは、人と人、人と地域など、さまざまな関係が切れてしまったことに由来するのではないかと思えます。地域差はあるでしょうが、居住する地域社会における縦や横のつながりが希薄となり、その崩壊に端を発した気がします。そして、一人ひとりの孤立が規範意識の薄れを生み、周りをかえりみない自己中心的な考え方が現状につながったと考えられるのではないでしょうか。

それらに直面するとき、日蓮大聖人のお言葉を思い起こします。日蓮大聖人は「報恩」という事を教えてくださっています。「報恩」とは受けた恩に報いることですが、具体的には、いつも周りを気遣い、やさしい気持ちを持ち、感謝しながら生活するということです。

わたしたち一人ひとりが「報恩」を意識しながら生活をすれば、地域コミュニティーの再生がはかられ、PTAを取り巻く諸問題はもとより、「命の尊厳」に関わる多くの社会問題が解決へとつながっていくことでしょう。

皆さまも、日蓮大聖人の教えである「報恩」＝周りに対するやさしい気持ちを持って、毎日の生活を送ってみてください。

「実乗の一善」

菩薩行研究所長
原井　慈鳳

「菩薩行研究所とは何をする所だ」「菩薩行研究所は何をしているんだ」私共がよく投げかけられた言葉です。「布教研究所でよい」と。

私は説いて回りました。法華宗だからこそ「菩薩行研究所です」と。それは人の生き方、生きる意味だからであり、法華宗の旗印は「菩薩行の実践」だからです。識者の中にも開宗750年の時「菩薩行の実践」とは何だか判らない、とのお言葉がありました。

それは判るとか判らないの問題ではないのです。私達の一人一人の行動なのです。

ふり返りまして、菩薩行研究所は規約の作成から始まり犯罪被害者の会の高橋シズエさんの講演会、当宗の環境問題に関する寺院教会の対応アンケート調査、当宗ホームページの刷新、環境問題研究の科学者と仏教の役割に関する交流、環境問題と菩薩行に関する当宗の考え方を対外的に発表するなど試みました。

『立正安国論』進覧750年の聖年に当っては、記念品

として『立正安国論』日めくりカレンダーを試作いたしました。門下各派に於きましては『安国論』の複製を頒布するなどの事業や『立正安国論』輪読会ノートなど、研究者の意見交換、また研究者の著述等々。確かに様々の角度の見解が述べられております。しかし、「対告衆」（説く相手）を意識したものと「実乗の一善」を菩薩行に於いて意識したものがどれ程ありましょうか。

宗祖の『安国論』の対告衆は幕府要人とか仏教者のみでなく時代を越えて国民を意識しておられる事をもっと認識しなければなりません。

研究所では『安国論』中、九問答一領解の宗祖（主人）の回答部分の要句を31選び、この真意を今日に照らして考えてみようと試みました。日めくりは特定の年度でなく毎年使って頂きたいと願うものです。これには英訳を施し、宗祖の御一代絵図を加えて大盛りの感もあるのですが、なるべく広い社会での活用を念願するものです。

宗会・所長会の後、カレンダー等の記念品準備期日はわずかで、企画・作成にはスタッフ一同、胃の痛む思いでした。「即遣変化人」の経文の如く、一つ一つの歯車が期限最終日まで回り続け完成出来たものです。

今日、世法が信頼を失って、道を見失っている時、「立正」を以て「安国」に向けて努力する生き方、「菩薩行の実践」を「実乗の一善」として示して行きたいのです。

合掌

編集後記

今年も、御会式の月を迎えました。日蓮大聖人の御命日は10月13日、その前後に法華の僧俗は相和し報恩感謝のお題目を唱えます。「お題目に出逢えてよかった」「今日という日を迎えられて良かった」感謝感謝の誠を捧げ、宗祖のご恩に報います。『立正安国論』進覧750年の御会式に参詣して、心新たに「ありがとう」感謝の気持ちを忘れずに!

編集長　佐藤 正純

法華宗信報
No.130
平成21年10月1日発行　発行人／原井　慈鳳　編集人／佐藤　正純
編集部／〒299-4341 千葉県長生郡長生村宮成373-1 清泰寺内 TEL.0475-32-0402
発行所／〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1 法華宗宗務院 TEL.03-5614-3055　印刷所／株式会社マックス